

蒼海走破

地雷也

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年が「Infinite Dendrogram」の世界でクラウンを組んで決闘や討伐などのランキングや冒険を楽しんでいく物語。リアルとデンドロ2つの世界を通して少年少女は交流していく。

▼本作品は現在、小説家になろうで連載中である「Infinite Dendrogram」の二次創作です。▼原作改変、捏造設定などがありますので、それらを踏まえた上で読んでいただけると幸いです。

初の小説なのに登場人物たくさん出てくるクラウンタイプの物語口調などかき分ける自信もなく見苦しいものになるかもしれません。

目次

開始前	1
キャラメイク	5

開始前

□2044年 3月20日 長谷川 千万

「・・・タカ、起き・カズ・・・、千万。いい加減に起きなさい千万。」
体を前後に揺さぶられたことで意識がはつきりしてくる。

「船で熟睡できるのはいいことだが、もう港に着いてるぞ。

のんびりしすぎると船員さんに迷惑がかかるから、早く降りる準備をしなさい。」

父さんがそう言っただけで急かしてくる。

「寝る前に、まとめてあるからこのかばんを担ぐだけだよ。」

僕は、まだ半分寝ぼけながら父さんに返答をする。

「そうか、準備がいいな。降り口に行こうか。」

わしゃわしゃと頭を撫でて立ち上がる。

「はい」

船を降りて港の駐車場へ向かって歩いてみると、港の人だろうか、父さんと同年代くらいの男性が話しかけてくる。

「長谷川先生お帰りなさい。」

「ああ、立花さんこんにちは。」

立花さんは日に焼けて真っ黒なうえ筋肉でシャツがピチピチで少し怖い。

「千万。この人は立花さんこの島の漁港の網元さんだよ。挨拶をしなさい。」

「は、はじめまして、長谷川千万です。引越してきましたよろしくお願ひします。」

僕の声は少し震えてしまった。

「お、エライのう、わしは立花つよし。網元という漁師のリーダーをとるよろしく。」

「息子も島で生活することになりましたので、これからよろしくお願ひします。」

そういつて車へ向かって歩き出した父さんと立花さんは歩きながら会話している。

1週間ほど父さんは職場である島を離れていたもので、その間に起きたことなど話しているようだ。

「千万くんは、今年から4年生やろ、娘の灯が同い年やから学校行ったら仲良くしてくれ。」

と言つて立花さんから唐突に僕へ話がとんできた。

まわりをきよろきよろ見ていてほとんど聞いていなかったが、

「はい」と元気よく答えておいた。

「引越し祝いに魚捌いても持つていきますから。」

車に到着すると立花さんは離れていった。

車で走っていると父さんから

「千万には迷惑をかけてすまないな」

「別に気にしてないよ。ネット繋がってれば生活に困らないと思うし」

僕は携帯をいじりながら答える。

僕こと長谷川千万（ハセガワカズタカ）は、両親が離婚したため父親の勤務先であるこの島へ引越してきた。

父はこの島で医者として働いている。常在の医者は父さんだけと聞いており、かなり大変そうだ。

親権に関してはかなり揉めたそうだが、母さんが専業主婦だったので親権は父さんに渡った。

引越しに関してはネットがつかねれば本当に気にしていない。

転校に関しては、再会を約束したり、最後に泣いてくれる人も特におらず、少し寂しかったのは内緒だ。もつとアニメ的に幼馴染とかがいてくれたらちがったのだろうか。

「・・・そうか。」

父さんは少し暗そうに返事してくるので、少し心配だ。

父さんは責任感の強い人なので親の都合を押し付けることが嫌なのだろう。

「自然も多い良いところだと思うよ。ごはんも美味しそうだし。」

僕は当たり障りのないことを言つて話を終わらせる。

「千万着いたぞ。今日からここに住むんだ。2階はどの部屋も使つて

ないから好きな部屋を選んでいいぞ。」

4年前に勤務になったときにリフォームした2階建ての家で2階には3部屋あるようだ。荷物は明日届く予定なのでそれまでに部屋を決めろとのことだ。

「部屋を決めて荷物置いたらリビングに来てくれ。プレゼントがあるからな。」

「はい」

僕は父さんのプレゼントにあまり期待せず階段を上がっていく。

海が見える部屋で荷物を下ろすとぼやいてしまう。

「確か前に父さんからもらったプレゼントってこの島の工芸品だったよな。」

なにかゲームソフトだと嬉しいんだけどな。下火だけど最近出た『炎の息Ⅱ』とか欲しい。

「父さん海が見える手前の部屋使うよ。」

「わかった。すまないが、診療所を開けないといけないから、業者が到着したら立ち会いをしてあげてくれ。家具の組み立ても依頼してるから心配ないぞ。」

「わかった。それで父さんプレゼントってなに？」

「ちよつと待ってろ」父さんは台所に行行ったようだ。持っている包装された箱は、顔ぐらいのサイズだ。こんな大きいゲームソフトはないだろうし、内心がっかりしていた。

「ほらほら、開けてみる。」父さんがニヤニヤしながら催促してくる。このプレゼントにそんなに自信があるのだろうか？

僕は、包装紙を乱暴に破っていくと入っていたのは今一番話題で、最も入手が困難な〈Infinite Dendrogram〉が入っていた。

「おーおーマジで、マジで〈Infinite Dendrogram〉なの？偽物じゃないの？」

かなり大きな歓声を上げてしまう。

「友達のゲームライターにお願いして準備してもらったんだ。」

「ありがとう。父さん、ものすごくうれしい。人生の中で一番うれし

いかもしれない」

「お、大げさだな。」

大げさでもなんでもなくものすごいうれしかった。クラスに一人持っていたやつ of 自慢を聞くのが、どれだけ苦痛だったかはそれだけで小説1本かけるくらいだ。毎日、掲示板などに入り浸って世界やジヨブ、エンブリオの情報を見てどれだけ空想していただろうか。

とにかく早く上に行って始めようと駆けだそうとすると父さんから呼び止められた。

「そのゲームを融通してくれた友達なんだが、明日の13時にグランバロア初期ログインの中央船の甲板にいるから最初サポートしてあげようかと言ってたな。もしそこにするなら連絡するけど、どうする？」

グランバロアは空想していた中でも第一候補だった。漫画史における金字塔漫画の影響が大きいよな。海賊系の超級職はもう埋まってる。掲示板には書き込みあったのは残念だ。

「わかった。グランバロアにするから。待ち合わせのためにその人のPC名教えてよ。」

「連絡しておくよ。名前は『醤油抗菌』だな」

キャラメイク

□2044年3月20日

部屋に戻って先ほど告げられた醤油抗菌に関して掲示板に挙げられた情報を思い出す。

醤油抗菌というPC名はグランバロア関連の掲示板を覗いたことがあるなら一度は目にする名前だ。討伐と決闘ランキングのランカー。”人間爆弾”という物騒な通り名を持ち、頭が痛くなる逸話をいくつも持っている。

曰く、半径500メートルの海水を全て爆薬に変え、モンスターの群れを木っ端微塵にした。

曰く、敵対クラン所属の「マスター」の体液を爆薬に変え、そのクランのアジトを吹き飛ばした。

「会うのは怖いけど、そんな人にサポートしてもらえるならスタートダッシュになるよな。」

とつぶやきながら考える。

無駄な時間を作らないためにも、キャラメイクとエンブリオの孵化とジョブの取得まで進めておこう。

トイレ、食事はOK

ゲーム機のヘルメットをかぶりスイッチを入れる。

光を感じると景色は一変していた。

「はい、ようこそいらっしゃいましたー」

気がつくくと自室ではない空間に僕はいた。

部屋の内装は木造洋館の書斎を思わせる。

そこにいたのはベストを着た猫チェンヤだった。

多くのプレイヤーのチュートリアルに登場しているAIだと掲示板に上がっていた。レアなAIに当たってみたかっただと考えるしまった。

「一番多いぼくでごめんねー」

思考が読まれているのだろうか、びっくりして変な声をあげてしま

「ごちらこそ、変なこと考えてごめんなさい。」

「いいよ、いいよ、気にしないで。事前に情報集めてた人には多い反応だから。それにしても僕たちAIに謝る人は珍しいかな。」

「本当にデンドロの中なんだ。目を閉じて開けたら切り替わってるなんてすごいです」

「ふふふ、ありがとう。それじゃあ各種設定を始めるよ。まずは、描画だよ。3種類に切り替わるから選んでね。」

3Dは酔いそうだし、アニメ描写はリアルに戻れなくなりそうだしな。

「そのままをお願いします。」

「オツケー。次はプレイやネームだよー。ゲーム中の名前は何にするー?」

「ウィルでお願いします。」

「その名前は使用している人がいるね。そのまま進めることもできるけどどうするー?」

「じゃあ、苗字としてテンミリオンをつけてください」

「オツケー。該当なしだよ」

「次、容姿を設定してね。」

のっぺらぼうと膨大なデータが表示される。

チエシヤにお願いして自分のリアルをデフォルトに設定してもらいじつていく。

出来たのは身長120cmほどの金髪碧眼の少年だった。あんまり原型が残らなかつた気がする。

「初期の所持品をプレゼントするね。」

アイテムボックスと5000リルと初期装備に選んだ革鎧と長袖シャツにズボン、ブーツと身長よりも大きな槍を受け取る。

自分よりも大きな武器を操る小さい戦士ってかっこいいよね。

「へエンブリオ」の移植だけど、へエンブリオ」の説明はいるー」

「予習してきたので大丈夫です。」

「オツケーじゃあと言ってるうちにへエンブリオ」移植完了です」

すごいいつの間にか移植されていると話題だったからずっと左手

を見てたのにまばたきしたら移植されてた。

「じゃあ最後に所属する国を選択してくださいねー」

「グランバロアでお願いします。」

「ちなみに軽いアンケートだけど選んだ理由はー？」

「父の知り合いの方がサポートしてくれるとのことなのと、漫画の影響です」

「うんうん、答えてくれてありがとうー」

「いよいよグランバロアに飛ばすね。大丈夫ー？」

「よろしくお願いします。」

「Infinite Dendrogramへようこそ。 僕らは君の来訪を歓迎する」